

専任教員教育研究業績

平成29年6月8日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
山本 華子	やまもと はなこ	保育学科	講師	男・女

担 当 科 目 名	学 内 委 員 会 等 (委員長)
「音楽表現ⅠB」「音楽表現Ⅱ」「表現実践」「おだたん人間成長講座」	

学 歴

和暦(西暦)年 月	事 項	学位
平成02年03月	東京藝術大学音楽学部楽理科卒業	芸術学士
平成04年09月～平成05年08月	大韓民国政府奨学生としてソウル大学校語学研究所、ソウル大学校大学院国楽科に留学	
平成06年03月	東京藝術大学大学院音楽研究科(修士課程) 修了	修士(音楽)
平成20年03月	東京藝術大学大学院音楽研究科(博士課程) 修了	博士(音楽学)

教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教育内容又は業務内容
帝京大学福祉保育専門学校	平成06年04月～平成15年3月	非常勤講師(保育・幼稚園コース「ピアノ」介護福祉コース「音楽」担当)
大妻女子大学	平成16年04月～現在に至る	非常勤講師(「保育芸術」「韓国語研究」「韓国・朝鮮文化演習」「音楽の世界」担当)
日本大学	平成17年04月～平成22年02月	日本大学芸術学部ORCNANA(オープン・リサーチ・センター整備事業:日本舞踊の教育システムの文理融合型基盤研究並びにアジアの伝統舞踊との比較研究) 研究員
洗足学園音楽大学	平成20年04月～現在に至る	兼任講師(「東洋音楽史」「日本の伝統芸能と音楽」「副論文作成研究」担当)
尚美ミュージックカレッジ専門学校	平成22年04月～現在に至る	非常勤講師(「民族音楽研究」「邦楽研究」「基礎音楽史Ⅰ」「基礎音楽史Ⅱ」担当)
タイケン学園日本ウェルネススポーツ専門学校	平成28年04月～平成29年03月	非常勤講師(「日本語とコミュニケーション」担当)
小田原短期大学	平成29年04月～現在に至る	専任講師(「音楽表現ⅠB」「音楽表現Ⅱ」「表現実践」「おだたん人間成長講座」担当)

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
東洋音楽学会	平成02年03月～現在に至る	会員(参事、RILM音楽文献目録委員会出向委員)
日本音楽学会	平成16年07月～現在に至る	会員
韓国音楽史学会	平成16年09月～現在に至る	会員
日本音楽教育学会	平成19年09月～現在に至る	会員(日韓合同ゼミナール委員)

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
『月刊韓国文化』	平成09年～16年	駐日韓国大使館文化院監修『月刊韓国文化』の編集業務(企画、取材、執筆など)。読者対象の観光旅行随行。
文化交流コーディネーター	平成15年～現在に至る	日韓交流のための伝統音楽公演のコーディネーター業務。人間国宝(韓国の演奏家)を日本に招き、日本の演奏家に同行し韓国公演を行う。アメリカ・コロムビア大学の学生が日本で和楽器を学ぶ際のコーディネーターも務めている。

コンサート企画・制作	平成06年～現在に至る	文京シビックホール、上野奏楽堂、成増アクトホールなどで、アジアの伝統音楽による国際交流公演を企画・制作。
韓国語通訳	平成20年～現在に至る	チョ・ソンジン(ショパンコンクール優勝)、シン・ヒョンス(ロンティボー国際コンクール優勝)、キム・ジュンヒ(ロンティボー国際コンクール2位)などのコンサート、インタビューにおける通訳業務。
韓国語翻訳	平成21年～現在に至る	韓国国立国楽院の日本向けパンフレット、「日韓伝統音楽交流」公演(紀尾井ホール)などのプログラム翻訳。 科研(北海道教育大学、成城大学など)の委託を受け、韓国の音楽関連資料(教育課程含む)を日本語に翻訳。

担当教科目に関する資格・免許等

名称	取得年月	取得機関
中学校教諭一種免許(音楽)	平成02年02月	東京都教育委員会
高等学校教諭一種免許(音楽)	平成02年02月	東京都教育委員会

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1『越境する雅楽文化』	共著	平成21年09月	書肆フローラ	様々な「雅楽」像を立体的に描いた一冊。A5判変・231頁。担当部分「韓国近現代の雅楽—李王職雅楽部を中心に—」(193-211頁)において、近現代の韓国の宮廷音楽を具体的に紹介した。
2『李王職雅楽部の研究—植民地時代朝鮮の宮廷音楽伝承』	単著	平成23年12月	書肆フローラ	「平成23年度科学研究費助成事業学術図書」として博士論文を出版化。現在の韓国の伝統音楽の状況を把握するのに必要な植民地期の宮廷音楽機関、李王職雅楽部に多角的にアプローチした。A5判上製、全528頁。
(学術論文) 1「朝鮮植民地時代の学校唱歌研究—初等教育用唱歌集およびその所収唱歌の分析を中心に」	単著	平成05年03月	東京藝術大学 修士論文	明治43年から昭和20年までの朝鮮における唱歌の官製教科書21冊を対象とし、音楽と歌詞の面から分析を行った。その結果、植民地化の時期を追うごとに、歌詞は朝鮮語から日本語へ、内容も徐々に軍事色の強いものや日本的なものが多く占めるようになり、末期においては日本の教科書と同一のものが用いられ、日本と同様の教育が施されていたことが明らかになった。
2「李王職雅楽部に関する研究—『職員録』と聞き取り調査を中心に」	単著	平成14年03月	『青丘学術論集』第20集(韓国文化研究振興財団助成研究)	戦後50年以上過ぎた調査時点において、被支配者である李王職雅楽部所属の演奏家たちが語った植民地期の記憶を改めて検討し、植民地化を新たな視覚から捉えることを試みた。107-154頁。
3「宗廟における李王職雅楽部の活動—一九二〇、三〇年代を中心に」	単著	平成17年08月	『東洋音楽研究』第70号(東洋音楽学会)	韓国のユネスコ世界遺産に指定された宗廟祭礼楽と佾舞は、植民地期を経て現在に引き継がれた。1920、30年代の資料をもとに当時の宗廟祭礼楽の実態を探り、現行のものとの違いを明らかにした。73-84頁。
4「李王職雅楽部の研究—植民地時代朝鮮の宮廷音楽伝承」	単著	平成20年03月	東京藝術大学 博士論文	植民地期(明治44～昭和20)の李王職雅楽部は韓国国立音楽機関である国楽院に継承された。本機関の様相を多角的に分析することにより、組織としての全体像と近代の宮廷音楽伝承の実態が明らかになった。
5「近現代における日韓伝統音楽の専門家養成比較—雅楽を中心に」	共著	平成20年06月	『第9回日本音楽教育学会音楽教育ゼミナール 日韓合同ゼミナール報告書』(日本音楽教育学会)	日韓の伝統音楽の専門家養成システムの中で、宮廷楽師養成に焦点を当てた比較研究。両国の所属機関の特質とその変遷に伴う楽師養成システムについて、日本は塚原康子、韓国(近代)は筆者、韓国(現代)は徐仁華が分担執筆した。20-27頁。

6「田辺尚雄の朝鮮雅楽調査がもたらしたもの」	単著	平成21年05月	『翰林日本學』第14輯(韓国・翰林大学校日本學研究所)	東洋の伝統音楽を研究した音楽学者、田辺尚雄(明治16～昭和59)が大正10年に行った朝鮮雅楽調査を現在の視点から振り返り、検討を加えた。25-48頁。
7「伝統音楽を通じた国際文化交流—文化庁文化交流使、常磐津文字兵衛の韓国派遣を例に」	単著	平成22年02月	『洗足論叢38』(洗足学園音楽大学)	伝統音楽による国際文化交流の方策を模索するための一例として、常磐津文字兵衛(三味線奏者)が文化庁文化交流使として韓国に派遣されたケースを検証した。77-84頁。
8「李王職雅楽部の日本公演(一九二四年)が意味するもの—「都をどり」との関わりから」	単著	平成23年02月	『洗足論叢39』(洗足学園音楽大学)	博士論文の継続研究。大正13年、李王職雅楽部が朝鮮から京都に赴き公演した史実を、日韓の第一次資料から明らかにした。その背景にある植民地化との関わりについても検討した。139-152頁
9「1910年代朝鮮における日本伝統音楽事情1—1915年-1917年前半期の『京城日報』記事を中心に—」	共著	平成24年02月	『日本研究』32(韓国中央大学校日本研究所)	植民地期の朝鮮で日本の伝統音楽が伝承された実態を当時の新聞『京城日報』の記事から浮き彫りにした。対象種目は、能楽、浄瑠璃、尺八、近代琵琶などであり、分析により全体的な傾向を探った。李知宣(韓国の日本音楽研究者)と共著。573-595頁。
10「1910年代朝鮮における日本伝統音楽事情1—1917年後半-1919年の『京城日報』記事を中心に—」	共著	平成25年12月	『国楽教育』36(韓国国楽教育学会)	論文9の継続研究。1917年後半-1919年の『京城日報』の記事内容を概観し、論文9と同様の手法で研究した。李知宣(韓国の日本音楽研究者)と共著。105-126頁。
11「韓国国立国楽院の伝統音楽普及と音楽教育の試みについて」	共著	平成27年02月	『洗足論叢43』(洗足学園音楽大学)	伝統音楽の普及を目指す韓国の状況を探るために、国家機関である国立国楽院の役割と活動に焦点を当てた。特に学校教育に携わる音楽教師研修を現地調査し、その内容をまとめた。金奎道(韓国の音楽教育研究者)と共著。29-43頁。
12「韓国地方国楽院における国楽振興の役割と実状について—国立民俗国楽院、国立南道国楽院、国立釜山国楽院を例に—」	共著	平成28年02月	『洗足論叢44』(洗足学園音楽大学)	韓国はソウルの国立国楽院を中心に3つの地方国楽院を擁し、伝統音楽の振興に注力している。地方国楽院の現地調査により、ソウルの国楽院との連携により伝統音楽の普及と教育を行っている地方国楽院の実態が明らかになった。金奎道(韓国の音楽教育研究者)と共著。15-29頁。
13「運営面から見た外国人のための和楽器教習—コロンビア大学MPプログラムを例に—」	単著	平成29年02月	『洗足論叢45』(洗足学園音楽大学)	外国人が和楽器を身につけるためのプログラムは、日本の幼児教育に伝統音楽を導入する際の参考事例としにもなり得る。アメリカ・コロンビア大学の日本における和楽器研修を、コーディネータの立場から運営面に焦点を当てて分析した。93-104頁。
14「武蔵野東第一・第二幼稚園を参観して」	単著	平成29年07月	『クロストーク5号』(芸術メディア研究会)	自閉症児と健常児がともに過ごす「混合教育」で知られる武蔵野東第一・第二幼稚園を、発表会、音楽活動、自閉症児クラスと3回に分けて参観した記録。2-7頁。
(その他・科研) 日本の伝統音楽文化の特質に根ざした音楽科教材開発と授業プログラム作成	共同	平成24年04月～平成27年03月	科学研究費助成による研究	研究代表者：澤田篤子。研究分担者として参加。授業プログラムの作成にあたり伝統音楽が指導内容の30～40%を占める韓国の実践状況を調査し参考にした。特に伝統音楽を用いた韓国の幼稚園やその教育課程の調査を担当した。

<p>(その他・口頭発表)</p> <p>1「アジアの伝統芸能にみる運動表現の民族的特性－韓国仮面劇「固城五広大」の様式性と運動表現の特徴」</p>	共同	平成09年10月	日本体育学会第50回記念大会 体育・スポーツ関連学会連合大会	韓国の仮面劇「固城五広大」について、朝鮮王朝後期の民衆文化の芸能様式と表現内容および運動表現の特徴を分析した。舞踊動作においては三拍子系のステップと腕を水平に保持する動作が特徴的であった。島内敏子、車玉秀、北野啓子、中村恭子、多田五月と共同発表。
<p>2「宗廟における李王職雅楽部の活動－1920、30年代を中心に」</p>	単独	平成16年10月	東洋音楽学会第55回大会	ユネスコの世界遺産に指定されている宗廟祭礼楽と佾舞を、植民地期の第一次資料から調査し、その実態について発表した。
<p>3「日本の公文書類に残された「李王職雅楽部」関係記録－『職員録』と『宮内省省報』を中心に」</p>	単独	平成16年11月	日本音楽学会第55回大会	植民地期朝鮮の李王職雅楽部の楽師は日本の宮内省に属し、日本の公務員として活動したため、日本の『職員録』と『宮内省省報』に個人情報記されている。彼らの氏名、創氏改名、生没年、所属機関などを抽出して整理した。
<p>4「李王職雅楽部関連資料に関する検討－肄習会プログラムを例にとって」</p>	単独	平成17年	韓国国楽学会・ICTM韓国支部共催国際会議(韓国ソウル市)	李王職雅楽部がレベル向上のために毎月開いていた「肄習会」のレパートリー研究。プログラムはオリジナルと復刻版2種類が存在する。内容を精査した上で復刻版の問題点を指摘した。
<p>5「近現代における日刊伝統音楽の専門家養成比較－雅楽を中心に」</p>	共同	平成20年01月	第9回日本音楽教育学会ゼミナール 日韓合同ゼミナール	日韓の伝統音楽の専門家養成システムの中で、宮廷楽師に関する変化は著しい。両国の所属機関の特質とその変遷に伴う楽師養成システムを検討するために塚原康子、徐仁華と共同発表した。
<p>6「李王職雅楽部の日本公演(1924年)が意味するもの－「都をどり」との関係から」</p>	単独	平成21年10月	東洋音楽学会第60回大会	博論の継続研究として発表。大正13年、李王職雅楽部が朝鮮から京都に赴き公演した史実を日韓の第一次資料から明らかにした。その背景にある植民地化との関わりを検討した。
<p>7「日本音楽研究における在外資料をめぐる諸課題と可能性」</p>	共同	平成26年11月	日本音楽学会第65回大会	日本の伝統音楽の研究における一次資料については、国外資料の中に大きな手がかりが期待できる例も少なくないため、在外資料の諸課題や可能性について議論した。山本百合子、深堀彩香、前原恵美、茂手木潔子と共同発表。
<p>8「韓国国立国楽院の伝統音楽普及と音楽教育の試みについて」</p>	単独	平成26年11月	東洋音楽学会第65回大会	伝統音楽の普及に国を挙げている韓国の状況について国立国楽院の役割と活動に焦点を当てた発表。特に学校教育に携わる音楽教師研修を实地調査し、その内容をまとめた。日本の伝統音楽への取り組みについても検討した。
<p>9「韓国地方国楽院における国楽振興の役割と実状について－国立民俗国楽院、国立南道国楽院、国立釜山国楽院を例に」</p>	共同	平成27年10月	東洋音楽学会第66回大会	韓国はソウルの国立国楽院を中心に3つの地方国楽院を擁し、伝統音楽の振興に注力している。地方国楽院の实地調査を行い、韓国の音楽教育と伝統音楽の普及の側面について金奎道と共同発表した。
<p>10「日本の雅楽における復元と創造－芝祐靖と</p>	単独	平成27年11月	東アジア音楽考古学国際学術会議(韓国ソウル市)	すでに失われてしまった古代音楽の復元は洋の東西を問わず大きな課題である。様々な立場から試みられている日本の雅楽の復元について検討しながら、芝祐靖

俗楽舎の活動を中心に」				と俗楽舎の活動を主に紹介した。
11「日韓における伝統音楽の海外普及－韓国国立国楽院「国際国楽研修」とコロンビア大学「MPプログラム」の比較による提言－」	単独	平成28年08月	第10回クロスメディア研究会（韓国ソウル市）	日韓の伝統音楽を外国人に教習するプログラムとして、韓国音楽では国際国楽研修を、日本音楽ではコロンビア大学MPプログラムを取り上げ比較した。
12「コロンビア大学MPプログラムについて－日本伝統音楽の海外普及の一事例として」	単独	平成28年10月	日本音楽教育学会第47回大会	コーディネータの立場から、日本の和楽器を学ぶMPプログラムの概要をまとめ、外国人が日本の和楽器を学ぶ際の方法論、課題、意義などを明らかにした。
（その他・報告書） 日本舞踊の教育システムの文理融合型基盤研究並びにアジアの伝統舞踊との比較研究	共著	平成20年09月	ORCNANA プロジェクト	日本大学芸術学部 ORCNANA(オープン・リサーチ・センター整備事業の報告書。編集担当・一部執筆。全7部からなり、公開講座、シンポジウム、研究発表会などの成果をまとめ、日本舞踊教育の調査内容を報告した。そのうち保育園・幼稚園あわせて24校にアンケートを実施し、その内容を集計した。
その他（表彰等）			特記事項なし。	